

今月の子ども

修学旅行生とD51

中園孝信（撮影・文）



中学校の最大の行事は修学旅行です。朝の国立科学博物館前では、早くも見学者が集まっています。これから自由行動のようです。中学生の表情にどこか緊張感があります。ネクタイにスーツ姿の教師が生徒に何か話し掛けています。中学生にとっては、自分たちで行動する初めての東京なのでしょう。

大きな木の陰で見守っているのは真っ黒なD51です。さあ、出発です！

今月の詩

ゆあさとしお（選・文）

子どもはいつも大人にとって未知の生き物である。

大人は子どもを見守っているつもりでいても、あっという間に立場は逆転し、追い抜かれてしまうのだ。それは大人が生きるのは主として「過去から現在」であるのに対して、子どもが生きるのは「現在から未来」であることによっているのだろう。

大人は感傷的な「思い出」に浸るが、子どもにとっては「今、この時」を冒険することだけがすべてなのだ。子どもの姿を見ていると「マインドフルネス（今自分に起こっていることを、判断や批判なくそのまま認識すること）」という言葉がそのまま生きていることがよくわかる。

[谷川俊太郎](#)

1931年東京生まれの詩人、翻訳家、絵本作家

子どもは駆ける

谷川俊太郎

もう忘れてしまった
くちのまわりに御飯粒をくっつけたきみ
拳闘選手みたいに手を前へ突き出して
はじめて歩きはじめたきみ
昨日のきみを
私はもう忘れてしまった
それはきみが私に
思い出をもつことを許さないから
きみがいつも今を全力で生き
決して昨日をふり返ろうとしないから
きみは日々に新しく
きみは明日を考えずに
私よりも一歩先に明日へ踏みこむ
いっしょに散歩するときも
きみはきまって私の先を駆けてゆく
その後姿が四つになったきみのイメージ

（『谷川俊太郎詩集』より）

だっこが大嫌いな子ども

特定非営利活動法人キッズドリーム 市川 フロスト 和美

とてつもない声で、大泣きする3歳児、誕生日を迎えた日、初めて家族と一緒に祝いをしました。食べ方を少し注意すると、レストランで大泣きをし始めました。仰向けになり、頭を床にバンバン打ち付け、足をジタバタさせて、壮絶な怒りをあらわにしていました。

3年間、誕生日やクリスマスのお祝いしたのは、乳児院の先生達でした。

私達家族は、この子の姉を生後1ヶ月から養育里親として、育てています。この子が産まれた時から、児童相談所に、「うちにいるお姉さんと一緒に育てます」と交渉していましたが、2年9ヶ月の歳月が乳児院で経ってしまいました。毎日、「さみしい思いをしていないだろうか。」と気がかりでなりません。乳児院から、この子を施設に移すタイミングで、里親委託のガイドラインを持ち出し、「両親の面会がない子どもは、乳児院から施設にではなく、里親ですよ」と猛烈なアタックを見相にし続けました。その後、「国連の代替的擁護のガイドラインには、兄妹分離防止と書いてあるんですよ」と交渉に交渉を重ねました。この子の支援方針が、里親委託になりました。「やっと、この子に会える」と思いました。

初めて乳児院に行った日、「ママがきたよ。挨拶しなさい。」と先生が言うと、大きながっかりとした、2歳児が「ママ？」いきなり抱きついてきました。私の膝の上に座ったり、ベタベタでした。「甘えてる」と思ったのは私の勘違いでした。

3ヶ月も毎日の様に乳児院に通い続けました。この子は、「産まれてから生活している乳児院から出され先生に会えなくなったらどうしよう」「でもママの家でお兄ちゃんやお姉ちゃんと遊びたい。」とても不安定になりました。委託の日にちが決まりました。念願のこの子がお姉ちゃんと一緒に暮らせる日が来ました。

私たちの家族の一員になった日に、夕食が終わってから、ソファに座って、抱っこをしたら、「嫌だ」と腕を突っぱねて抵抗しました。その後、床に転がって、足をバタバタさせ、ギャーギャーと真っ赤な顔で怒り狂いました。

その日から、話もあまりしてくれなくなりました。挨拶すらしてくれません。この子はアイコンタクトが取れません。お話をするときも、私の背後霊が見えるのかと思う所を見えています。時々振り返って、何を見ているのかと確認するほど、アイコンタクトができないのです。

そして、パフォーマンスは続きます。足をバタバタさせ、怒りを表すような泣き方で、ギャーギャーと言います。テレビを見ている私の前で、わざわざ大パフォーマンスを繰り広げます。しかも里父のいない時に限ってやるのです。

里父とは、とても仲が良いのです。抱っこをされるときも、私を上から下まで、勝ち誇った表情で見ます。「ほら、私は、こっちにいるのよ」と言っている様です。しかたがありません、乳児院で、「ママは、今日もこなかった」とクリスマスの度に、誕生日の度に、寂しかったんだと思います。

1年半ほどたったある日、彼女は熱を出しました。病院に連れて行った待合室で、「どうして欲しい、何かして欲しい？」と聞いてみました。「あっちに行ってください。」と小さい声で言われました。「本当は、抱っこして欲しいんじゃないの？具合が悪い時ぐらい、抱っこしてって言えば良いじゃん」と言ってみました。彼女は、黙って立ち上り、抱きつきました。抱っこしながら、乳児院で、この子が熱をだした時のことを思い出しました。

病院と一緒にいった後、乳児院に帰ってからは、自分で、ベビーベッドによじ登り、ドサッと中に落ちると、自分の親指を根元の方までガバツと口の中に入れ、チュッチュと吸い始めました。私が横にいるのに気づき、「ママ、帰っていいよ。バイバイ」と私に言いました。せめて、寝るまでは、

一緒にと思いました。そんなことを、思い出しながら、しばらく座っていると、看護婦さんが、「ベッドの用意ができたよと呼びに来ました。すると、抱っこされていた子は、すぐに立ち上がり歩いて行きました。こんなに長く彼女を抱っこしたのは、初めてでした。



何でも、自分1人でやって来たんだと思います。彼女にとって、「できない」と言う言葉は禁句なのです。

家に来て、2年が経ちました。時々、私と対立している事を忘れ、フツと楽しい表情をしてしまう事もあります。一瞬、「しまった」と思うとまた嫌な顔をします。まだ、話しかけても、直ぐには返事ができないのですが、小さい声で、ボソッと返事をする時もあります。少しずつ氷が溶けているのかなと思うときがあります。

家族を知らない子と、家族になるのは大変です。自分が、つくづく甘かったと思います。それでも、私にとって、お姉ちゃんと2人で遊んでいる時の姉妹の笑顔が一番のそして特別な宝物です。（了）

（写真は児童相談所が実親から掲載許可をとってあります）

子ども研究ノート

1) 私の子ども研究から

鉄矢悦朗（東京学芸大学教授）

1. はじめに～「ヒト育て」とデザイン～

「ヒト育て」とデザインは近い。子育ても、子ども支援も、大学教育も、かなり大まかにくれば「ヒト育て」であり、場合によっては仲間と協働して何かを行う場合にも、「ヒト育て」の要素を含んでいる。本稿で、いかに「ヒト育て」とデザインが近いのかを示すことで、「ヒト育て」に関わる人たちがデザインという行為をしていると常々感じている筆者の考えを伝えたい。まずは、筆者の捉えているデザインについて、東京学芸大学から発行した「ものづくり de 教育」(Vol.14)の記事を示し、再考する。その後2つの事例を通して、「ヒト育て」とデザインの距離を示していこうと思う。

2. デザインについて

高校生から大学生になった学生に向けて、それまでの図工や美術の中にあるデザインと、意味が拡大しているデザインについて、考えを巡らせてもらうことを大学一年生の課題に込めている。「小学校の新しい力」というキャッチフレーズをつくり、ものづくり教育選修を立ち上げた際に、東京学芸大学の[「ものづくり de 教育」\(Vol.14\)](#)というニュースレターにデザインについて、以下のよう書いた。

デザイン【名】よみ：でざいん【動】でざいんスル

意：表面的な形のことから、様々な複雑な要素を的確に構築する行為(判断・プロセス)など、現代では意味が拡大している言葉。/ Ex. デザイン家電、システムデザインなど。人とモノ、機能と空間など、モノゴト複数間の関係を「より良く」するための行為や結果を示す言葉。ただしこの「より良く」という点には、注意が必要。「より良く」と考える「志」の方向が、どちらに向いているかで、デザインは大きく変わる。手法は、本来求められてきた根源から再構築するものや、まったく違う視点で捉えなおす手法など様々。

word イケメン・美人、性格が良くて、勉強ができて人も人に惚れない。何か足りないと感じる。その人の未来に対する考えや志が鍵となっているのです。デザインも同じです。形・素材・機能性だけでなくデザインに込められた「志」が、大きな鍵になります。教育をデザイ

ンする場合も、教育にどんな志を持つかが大事。ともに学芸大で学びを問い「志」を磨きましよう。(鉄矢)

上記を「ヒト育て」として読み替えてみると、「ヒト育て」は、その人が「より良く」生きていくためのヒト・モノ・コト・バなど複数間の関係を支援していく行為（判断・プロセス）や結果である。そして、その対象となるヒトに、対応していく私たちにはなにより「より良く」という「志」の方向が問われていくのである。そして「なぜ、そうする必要があるのか」根源から問い、そのヒト目線で「より良く」生きていく育みを考え、行動しなければならないのである。

3. 事例1：遊具「Yu-Mo」

Yu-Moは、「遊ぶ網」をローマ字化したネーミングである。ウェーブメッシュという立体的な厚みのある網の活用に関する共同研究^(注)からデザインがスタートした。つまり、Yu-Moのデザインと言うより、ウェーブメッシュの活用デザインと言ったほうが良いだろう。ウェーブメッシュでは想像しにくいので、これを（仮）アミちゃんというヒトとしよう。アミちゃんは、きれい好きである（ポリエステル製で水洗いが可能）、人当たりが良い（厚みがある分、クッション性が高い）、友人の紹介上手である（大きな目の網なので、中まで見通せる）など、こんなアミちゃんの個性・特徴を活かして、アミちゃんの成長を育みたい。このように素材の与条件となる特徴を見出し、その特徴が活きるようにデザインをしたのがYu-Moである。そして、こども向けの遊具として「より良く」スキンシップを楽しめるものとしてデザインし、フレーベル館の協力で商品化したものである。こどもの頃に、友達とのスキンシップのある遊びをさせたいという「志」を表現したものとなった。



4. 事例2：学生MHの卒業研究「考えること。ーきっかけのデザイナーー」

学生MHは「スポーツが得意で、動くことに躊躇はない。フットワークがいい。人と出会って学んでいくタイプ。人間好き。会話上手、反応上手な聞き上手。机に向かっていることは苦手。楽しいことだと続く、無理もする。目立つことも好き。広い意味でのデザイン、教育に興味がある。教員養成に迷いがある。迷いがある学生の存在に気付いている。彼らを何とかしたい思いがある。単なる立体デザイン（プロダクトデザイン、空間デザインなど）の卒業制作には興味がない。」この学生を相手に、どのような卒業研究というプロセスを通じて「ヒト育て」となるものにつなげるかが、筆者の「ヒト育み」課題であった。筆者が「より良く」育みたいところは「教育に興味があるところ」「人に興味があるところ」「楽しいことだと無理もする」といったところだった。本人との話し合いの中でゴール目標の一つを出版とし、そのプロセスをWebで更新していくといったものが見えたとき、本人のモチベーションは一気に高くなった。本をデザインする（制作する）ための内容は、本人が気づいていた「迷いがある学生の存在」から導き出したようである。

5. まとめにかえて

以上、原稿を書きながら、「風の便り」というWebニュースレターという特徴を活かせるようにハイパーリンクをつけてみた。リンクに飛んでみてほしい。「転んでもただでは起きぬ」とか「一石二鳥」などとも言うが「最小限の努力で最大限の効果」も筆者の目指すデザインが求めている本音である。「ヒト育て」という言葉は、本稿で初めて使用した。「子育て」「大学教育＝学生育て」「仲間育て」いろいろな「ヒト育て」すべてがデザインに通じていると考える。だから、デザインという異分野のようなどころから、「日本子ども支援学会」の末席に居場所を見つけている。

2) 子どものころ：Q&A

深谷和子

オバケがこわくて、夜、トイレに行けません (小1女子)

Q

わたしは、オバケの絵本をよんでから、オバケがこわくて夜ひとりでトイレに行けません。おねえちゃんに、ついてきてもらうこともあるけど、起きてくれないこともあります。ほんとにこわくて行けないときは、ガマンしていることもあります。でもわたしは、ひとりでトイレに行けるようになりたいのです。(はるみ)

(以下は授業で「あなただったら、どう答えます?」と聞いて、学生さんたちから出てきた言葉を文章化したものです)

A

はるみちゃんも、オバケがこわいのね。

私も子どものころは、おばけがこわかったなあ。だから、はるみちゃんの気持ちは、すごくよくわかるよ。会ったことも、見たこともないのに、すごーくこわかったの、へんね。

はるみちゃんは、絵本でオバケを見て、こわくなってしまったのね。絵本にかいてあったオバケは、とってもこわいオバケだったのね。

でもね、オバケって、ほんとはすごく「恥ずかしがりやさん」なんだと思うの。だから、夜に、お友だちを探しに、こっそり、出てきたりするんじゃないかな。オバケもお友だちがほしいのね、きっと。

「恥ずかしがりやさん」のオバケは、もしかしたら、明るいところがイヤなのかもしれない。だから、お母さんにおねがいして、ろうかやトイレの電気を、すこし、明るくしてもらったらどうかな?そしたらオバケは、ほかのくらいところに行っちゃうかもしれない。

それから、オバケが来ないように、はるみちゃんの大好きなぬいぐるみやお人形をおいて、オバケが来ないように、見はりさせておくのもいいかもしれないね。

でも、私はまだオバケに1どもあったことがないの。だから、もしかしかしたら、オバケなんていないのかもしれないなって、このごろ思うの。(了)

イベント情報

第1回子ども支援学会フォーラム

2018年 **9** 月 **15** 日 (土) 13時から17時 於：[東京学芸大学](#)

趣旨説明：深谷昌志 総合司会：清 文枝

第1部 子ども支援の隘路となるもの

	司会：未定
1.北区わくわく広場の活動から	安田勝彦
2.天理市の子ども支援活動から	市本貴志

第2部 ワークショップ「アロマザリングの中で子どもの成長」

	司会：中山哲志
基調提案：アロマザリングとは何か	根ヶ山光一 (早稲田大学教授)
パネラー：1) 里親による子育て	青葉絃宇 (東京里親会会長)
2) 学童保育の現状	中田周作 (中国学園大学准教授)

自己紹介（到着順）

○ 綾田 雄公（こども支援士）

うどん県出身の私は現在、東京で、放課後児童支援員として、全児童対策事業に携わっている。小学校の敷地内で展開している事業で地域の方にも協力をしていただきながら、放課後の子どもたちを見守っている。子どもたちとは「ただいま」「おかえり」からはじまり「またね」で終わる関係である。また中野区でボーイスカウトのリーダーとして、地域の子供達に関わっている。この活動理念は、「野外で、子どもたちの自発性を大切に、グループでの活動を通じて、それぞれの自主性、協調性、社会性、たくましさやリーダーシップなどを育てていく」。私は一つの教育現場での指導員でもある。

数年前、子ども支援士の認証を受けた。受けたことで、地域の力の大切さを改めて感じた。同受講者にも様々な職業・団体他の方がいて、それぞれがそれぞれの立場で子どもたちのことを考えて、関わっていることを知り、「色んな人がいて面白い。“人”をつなげたい」とわくわくした。身の回りの子ども達にいろんなことが提供できるじゃん。

今は、子どもに関わる大人と大人をつなげる事をしていきたいと感じている。皆さま、このような私ですが、どうぞよろしくお願いいたします。

○ 清（池田）文枝（テレビ朝日アスク講師・足立区そだち指導員）

1984年に東京学芸大学を卒業後、札幌にある北海道テレビ（HTB）にアナウンサーとして入社。その後フリーになって東京に戻り、NHKの科学番組やテレビ朝日のニュース番組などをキャスターとして担当。子育て期間中は、昼のワイドショーで「シングルマザー」「DV」「アダルトチルドレン」などの家族問題を当事者のロングインタビューで切り取ってきた。13年ほど前からは教える側に回り、アナウンサー養成学校である「テレビ朝日アスク」で大学生やプロの喋り手を教えている。

同じころから、地元の公立小学校で一斉授業や集団行動に遅れがちな子どもたちを個別でサポートする仕事も始めた。小学生でも大人でも、教える時の基本方針は同じ。1回の授業の中で、本人が自分の変化を感じられるように全力を尽くすこと。ひとつの「できた！」が学びに対するモチベーションを保つから。

初等教員免許と運転免許の他、潜水士の免許を保持。マイブームは「女々しくて」で紅白に4回連続出場したエア（当て振り）バンド「ゴールデンボンバー」。

○ 榎本 太麻子（二期会オペラ歌手）

声楽家です。音楽のレッスンは、3歳の時に絶対音感を身に着けるお教室から始まりました。「たなかすみこ」先生は、世界で初めて、幼児の音楽教育で、音符に色を塗るという方法を考えだされた先生でした。『いろおんぷ』です。そのおかげもあって、私は音楽が一番得意でした。中学、高校とたった一学年160人の小さな女学校では、私が歌うと「サインください〜い！」と言う下級生の列ができて、まるで甘い甘い世界の中で6年間を過ごしました。17歳の時に、その門を叩いた恩師の畑中更予先生には、私が48歳になる迄、歌だけでなく詩や文学や哲学や宗教や、人間とは何かとか、ありとあらゆる事を教えて頂いておりました。

小さい時から子どもが大好きで、18歳の時から子供どもにピアノや歌など教えております。今は東宝の研修所でミュージカルの歌を教えています。ミュージカルや演劇の歌を教える仕事も30年になりました。また、東京成徳大学「子ども学部」の講師や、付属幼稚園で毎週3歳児からの音感教育をさせて頂いております。皆さま、どうぞよろしくお願いいたします。

○ 秋山 恵美子（専門里親、民生児童委員、人権擁護委員）

私は里親歴31年目（専門里親）の秋山恵美子です。長期委託を主として、現在5人目の中2男子を受託中です。

親と分離体験のある彼らは身体に、学習に、何よりも心に傷があり、その特効薬はなく、日々を安心安全で淡々と積み重ねていくだけです。自然界でも養育できない場合は、誰かが代わって育てます。世の中には赤ちゃんがいて、お年寄りがいて、障害のある方がいて、そして里親子がいて当たり前であっ

てほしいものです。

養子縁組里親さんもいますが、それに該当しない子供たちもたくさんいます。愛されていると実感した子は、例え養育のリレー、バトンタッチがあっても育ちます。「あなたのそばにいるよ。いつも見守っているよ。大好きよ。」と伝え続けます。

ただ、里親は一人では出来ません。夫婦で共に考え、共に同じ方向を向き、歩んでいきます。

また、里親、里子共に仲間がいることが励みになり、たくさんの方々のお力を借り、各関係機関と手を携えて、彼らを社会全体で育てていきたいと考えています。どうぞよろしく願いいたします。

なお、このお陰で民生児童委員（6期目）と2年前より人権擁護委員をさせていただいております。

○ 中田 周作（中国学園大学）

現在、中国学園大学で社会学や教育原理、教育社会学、学童保育論、学童保育実習等を担当しております。専門分野は教育社会学・子ども社会学です。

最近、学童保育について研究をしています。学童保育は、近年、大きな変化の時を迎えています。近い将来、学童保育の先生の養成を大学で行うことも必要であると思います。本学でも、これまで、教育実習や保育実習等を参考に学童保育実習を組み立ててきましたが、学童保育の独自性が上手く反映できていないと感じています。この点について、学童保育の先生方と定期的に研究会を開催しており、学童保育独自の実習のあり方を模索しています。

教育支援人材認証協会には、設立当初から加わっており、高校生向けのこどもパートナー講座の開催等に力を入れています。本学が位置する岡山のような地方都市では、大学生が大都市に流出するため、高校生が子どもの遊びに関われる環境をつくることは必須です。

地域活動としては、子どもの自然体験活動に取り組んでいるボランティア団体「わんぱく教室」の活動に参画しています。自然体験活動には危険が伴うので、安全に楽しく遊べるノウハウをもった地域集団は、これから、ますます大切になると思います。

○ 板東 克則（山田小学校校長）

新入会委員の板東克則先生は、神戸市立山田小学校（山間部の小さな小学校）を、この3月で定年退職されます。2018年2月1日（木）の公開研究会で発表された記録を、お許しを得て転載します。4月からは、兵庫教育大に進学されるとか（F）

「最後の授業：再び、憲法前文を読む」—自己紹介に代えて

今から30年近く前、「安保闘争」の授業に取り組んだ。それが、私の授業の「入口」になり、生涯目指す頂となった。校長として、教師として、最後の時を迎える今、再びあの頂を目指したいという想いがふつふつと湧き上がってくるのを押さえることはできなかった。4月からの歴史学習で、子どもの目が変わった。ふるさと「山田」が歴史の中に表れるにつれ、子どもたちは歴史の中に引き込まれ、そして、学びは深く、静かなものになっていった。そういう子どもの姿を、心の底から信じることができた。

憲法は、日本の歴史の帰着点である。その憲法が、今、揺れている。憲法改正の是非を問うのではない。歴史を学び終えた者として、そしてやがて担う主権者として、課題に真正面から取り組み、深い思考の世界を体験することこそが、ねらいである。

大雪の午後、100人を超える参観者の中、12人の子どもたちは静かに座っていた。

黒板に貼られた「アメリカ合衆国憲法前文」があまりにも日本国憲法前文に似ていることに、素直に驚きの声をあげた。以前に読んだ前文を広げ、制定時のGHQの存在を思い起こし、納得した。同時に、かつてあれほど称賛の声をあげた前文への想いもわずかに揺らいだ。あたかも制定時の国民の想いと現代の人々の想いの変遷にも重なるように見えた。日本全体では改正をどうとらえているのだろうか、という問いに、3原則に対する想いは変わらないという考えや、ニュースや国会での動きに言及する子もいた。「憲法改正に対する各政党の考え」の資料を読み、改正に賛成・反対、考えが一番近い政党、その理由を書き込んだ。護憲が5名、改憲は7名だった。

改憲派の子どもが口火を切った。

「70年間の不戦はすばらしいが、ミサイル問題や外国の大統領が変わり、必ずしも安全ではない。」

新しい人権問題などから、加憲の意見も続いた。問うとじっくり考え、静か沈黙と静寂の中で、どの子も静かに、自分の想いを、自分の言葉で口にした。人の意見と自分の考えを重ね、響き合い、考えを変える者、より深く自分の考えを確かめる者が、相次いだ。どの子も人と語り、自分と語っていた。100人の参観者と白銀の世界は、完全に子どもたちの背景と化した。

何週間も経つ今でさえ、私の心は震えている。
子どものすばらしさに出会い、すばらしい時間を共にできたこと・・・
私は、最後に、再び、頂に立つことができた。(了)

句会 むさしの

○ 買物の男のボヤキ亀鳴けり 安田 勝彦

亀鳴けりが春の季語です。古来亀は鳴くものとされてきましたが、実際は亀には声帯など無く鳴くための器官がありません。古歌などで朦朧たる夕暮れにどこからか聞こえる声を「亀鳴く」と詠んだことが、俳句で想像力と遊び心の季語として使われはじめました。

スーパーマーケットで買い物をしたことがない初老の男性が、家の者に頼まれて仕方なく買い物をして「何でこんなことを俺がしなくてはならないのか」とぼやいている様子と、鳴けないけど鳴いている亀で表しました

○ 合格を大寿司桶で祝いけり 森永 徳一

季語は「合格」です。難関校合格を孫の好きな大きなたる寿司を囲んで、3世代がお祝いをしている様子を詠んだ句です。家族団欒の様子は、最近は見られなくなりましたが、私の受験時代を振り返り（郷愁も含め）詠んだ句です。大寿司桶（私の故郷：大分県国崎半島地方では、慶祝日には、大きな寿司桶の「五目散らし寿司」で、お祝いをしました。山椒の葉を寿司の上に散らしたので「木の芽寿司」とも、呼ばれます）「木の芽の樽寿司」か「大樽の鯛めし」でお祝いをしました。

○ 一つかみ掴みきれない歳の豆 上島 博

節分のとき、わが方は数え歳に一を足した数の豆を、半紙に包んで氏神様に供える。一つかみで数をちょうど取れたら吉兆である。小さいころは、よっぽど少なめに取ったつもりでも、歳の数をはるかに超えたものだ。しかし最近では、思い切り手を広げて掴んでも足りないようになった。64の豆を数えて、長く生きたものだと思う。しかし、この歳になっても分別や知恵が熟したとはとても言えない。一つかみ半で済んでしまう軽忽な歳月であったような気にもなる。

*みなさま:無季でも自由律でも、俳句めいたもののご投稿を歓迎いたします。

今月の本棚

阿部 彩「子どもの貧困」(岩波新書・2008年、860円)

深谷昌志

○貧困についてのデータの提示

本書は子どもの貧困に警鐘を鳴らした書として知られる。2008年の初版だから、発刊されて10年が経つ。あらためて、本書の「はじめに」を読むと、格差の存在にはやむを得ない面もあるが、貧困は「許容できない」。そうした子どもの「許せない」貧困の状況について、「できるだけ客観的なデータを読者に提供する」のが本書の目的だという。

本書の読後感も「はじめに」につきる。子どもの貧困率の経年比較や国際比較、そして、親の学

歴と子どもの進学意欲、母子家庭の経済状態など、子どもの貧困に関する基本的なデータがコンパクトに紹介されている。したがって、市などの行政担当者が起案書を書く際の必読文献になろう。そうした反面、同一レベルの客観的な資料の紹介が続くので、貧困について情報を得られるものの、貧困に対する怒りなどの感情は湧いてこない。

阿部本の対称の位置に、堤未果の「ルポ・貧困大陸アメリカ」（岩波新書、2012年、740円）がある。アメリカ社会の底辺を取材した印象をルポ風にまとめたもので、発売当時、注目を集めた本だ。一面的な指摘とを感じる面もあるが、貧困にあえぐアメリカの人たちの姿が臨場感を持って迫ってくる。

○アンダークラスの結集は可能か

子どもの貧困を構造的に理解したい方には、橋本健二の新刊「新・日本の階級社会」（講談社現代新書、2018年、900円）を勧めたい。同書によれば、現在の日本の社会構造は①資本家階級、②新中間階級、③正規労働者、④旧中間階級、⑤アンダークラスに分かれるという。「一億総中流化社会」といわれた日本がどうして格差の拡大した階級社会へ陥ったのか。橋本は従来の労働者階級が「正規」と「非正規」とに分断され、後者を中心にアンダークラスが誕生した。就業人口の15%にあたる層で、その多くが貧困予備軍となる。そして、近年、自営業などの旧中産階級のアンダークラス化も目立つという。

そうした状況の中で、既得権益を持つ階級が格差是正に意欲を示すとは考えられないから、子どもの貧困状態は悪化すると見通す。橋本は「格差社会克服の担い手となりうるのは、資本主義経済のメインストリームから外れた」アンダークラスやパート主婦、専業主婦などが「リベラル」の旗印のもとに結集できるかどうかだと説く。市民運動の高まりは発展途上社会の現象と思っていたが、日本でも、ラジカルな市民革命が求められているのを感じる。（了）

編集後記

風の便り創刊号をお届けします。皆さまのご愛読と、ご感想なども含め、ご自由なご投稿をお待ちします。（投稿先：kazukofukaya@nifty.com）

※ハイパーリンクについて……鉄矢先生のご提起を受けて、ネット情報の利点を生かすハイパーリンクを張ることにしました。リンク（青文字で下線が引かれている）をクリックしたら、その情報のウェブページなどへジャンプすることができます。ワードの場合は、右クリックして「ハイパーリンクを開く」を選んでください。

※頂戴したお原稿を、内容を損ねない範囲でフォントやレイアウトなど修正している場合があります。また、誤字脱字の無いように校正に務めておりますが、抜け落ちがありましたら、ご容赦ご指摘をお願いいたします。

※本号の1ページ目の詩は著作権協会の許諾を得てあります。

編集委員：深谷和子・中園孝信・湯浅俊夫・三枝恵子・大高志芳・清(池田)文枝・吉野真弓・上島 博

<風の便り創刊号目次>

今月の子ども、今月の詩 -----	中園孝信・ゆあさとしお
子ども支援活動実践報告 だっこが大嫌いな子ども-----	市川フロスト和美
子ども研究ノート	
1) 私の子ども研究から -----	鉄矢悦朗
2) 子どものこころ：Q&A -----	深谷和子
イベント情報	
会員談話室 <会員自己紹介>-----	織田雄公・清 文枝・榎本太麻子 秋山恵美子・中田周作・板東克則
句会 むさしの -----	安田勝彦・森永徳一・上島博
今月の本棚 -----	深谷昌志
編集後記 -----	ニューズレター委員会